

2025 丹波屋冒険倶楽部

冒険の記録 ~白雲山編~

帯広支店 肥料課 信行友寛



はじめに

2025年7月5日。鹿追町の天気は晴れ。快晴とまではいかないが日差しは十分すぎるほど強い。北海道の夏はいつからこんなに暑くなつたのだろうか。熱中症という症状はいつからあるのだろうか。日射病や熱射病の方がしつくりくる。熊鈴。補給用の水。塩あめ。コーヒーとそれを温めるパワーガストリプルミックスとギガパワーストーブも持つた。靴ひもを結び直し、標高差376m先の白雲の頂へ。

Mountain Climbing

集合場所は、白雲橋駐車場。到着したころには、全国各地のナンバープレートの車とレンタカーで駐車場は埋め尽くされ、白雲山が人気であることが一目でわかる。然別川沿いの脇道に



何とか縦列で車を停め、それぞれがおもむろに準備を始める。幸田会長をはじめ登山経験の豊富な横須賀支店長、播磨取締役、下浦次長、横川社長は、慣れた手順で装備を整えていく。その様子を確認するように、今回が本格的な登山初挑戦になる、半田部長、信行、森谷課長がバタバタと準備をはじめる。

登山道入り口から一步足を踏み入れると、鬱蒼とした草木が程よく陽光を遮る。それでも暑い。湿度が高い。時折吹く沢からの冷たい風が心地よく感じる。人ひとりが通れる幅の道を列になって進む。土と岩と木の根が織りなす道は、何千人の人が同じ場所を歩くことで山肌が踏み固められた証。ハイキングではない。本物の登山だ。登山道は整備されているとはいえ、原生林の中もあり、松の幼木やシダ類が覆いかぶさり、実際より狭く感じられる。登り始めは、石と木の根が階段のようになっており、少し急な傾斜が続く。体力がじわじわと消耗されていく。下山してきた登山者とすれ違う際は、お互いに譲り合いをするのがマナー。疲れているときは、ちょうど良い小休止となるのだが、「お先にどうぞ！」と道を譲られると、こちらも少し気を遣ってペースを上げてしまい、かえって息が上がる。できれば、先に降りて行ってもらいたいものだ。



そんな不純な思いを神様が見ていたのか、2人の登山者とすれ違った直後、後方から幸田会長の驚いた声が聞こえた。なんと、下山してきたのは、丹波屋の得意先である建業会社の社長だったのだ。

スキーのトレーニングの一環のことだ

が、私とは違う息ひとつ乱れておらず、姿勢もスマート。こちらはゼイゼイ言いながら挨拶するのがやっとだった。こんなときに名刺でも差し出せればよかったのだが、山に持ってきているはずもなく…。すれ違いが難しい登山道よりも、世間のほうがよほど狭いと実感した。トドマツなどの針葉樹が多く、カバノキなどの広葉樹は少ない。倒伏した木の幹には苔がむし、自然の力強さを感じさせられる。景色を楽しみながら行きたいところだが、滑りやすい足元ばかりが気になり、気付けば下を向いた姿勢で歩いている。よく言えば、一生懸命に登っている。どのくらいの時間歩いただろうか。『もう少しで尾根に出る』との横須賀支店長の言葉に勇気づけられながら、一步一步前に進んでいく。徐々に日差しが強くなり視界が開ける。尾根に出ると勾配は緩やかになり、道端の雑草もクマザサ一色になる。右手の木々の隙間から十勝平野が顔を出し、左手には然別湖の湖面が、ちらりと見え隠れする。目線が上がり、歩きも軽快になる。途中、少し長めの休憩をとり、いよいよ山頂を目指す事にする。平坦な道は終わり、岩肌が多く、急な傾斜が続く。一步踏み出す前に、どの岩に足を運ぶかを考えながら慎重に登っていく。山頂が近づくにつれ岩は更に巨大になり、「登る」というより「よじ登る」ような感覚になる。やっとの思いで山頂に到着。





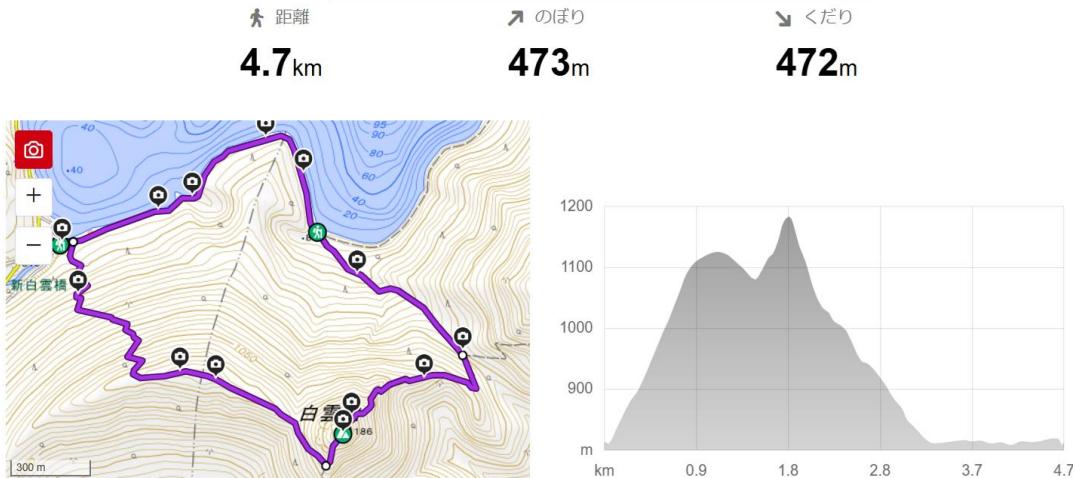
山頂からの眺望は、先ほど見てきた同じ景色のそれとはまったく別物で、然別湖と十勝平野、青い空と白い雲が一度に見渡せる絶景に思わず感動させられる。沸かしたコーヒーで登頂を祝い、しばしの達成感に浸る。下山ルートの打ち合わせを行い、体力が少し戻ってきたところで、下山を開始する。登ってきたルートに戻らず、然別湖を横切る道を選択する事にした。湖側の木々はシラカバ等の広葉樹が中心となり、足元はシダ類やクマザサが繁茂し道を塞いでいる。岩場には大小の隙間があり、いかにもナキウサギが身を潜めていそうな場所ではあったが、今回は姿を現してくれず、疲労感だけが増していった。急斜面が続き、足が言うことを聞かない。天望山との分岐付近になると道は緩やかになり、長い緩斜面が湖畔道まで続く。あともう少し。入山届に名前と時間を記入してから約4時間半。下山時間を15時50分と登山ポストに記入。全員無事に出発地点の白雲橋駐車場に戻ることができた。出口を通過したときに幸田会長が「Before After！」と登山終了の一言。



全員で完歩できた満足感と疲労感を、汗の滲んだTシャツが物語ってくれている。



【↑ナキウサギ * Wikipediaより】



野 営

然別湖北岸野営場は、その名の通り、然別湖の北側の湖畔に位置し、便利さとは無縁の野営場である。最寄りのコンビニは、鹿追町のセブンイレブン。車で 37 分 31 km の道のりとなる。忘れ物はできない。炊事場の水は、プラスチック製のタンク(おそらく農家さんご愛用のスイコー(株)スーパー ローリータンク)を利用した簡易的なもの。しかも、『この水は飲料水には適しておりませんので、煮沸してご使用ください』との張り紙があり少し不安を覚える。炊事棟およびトイレ以外に照明は無く、それらも午後 10 時ごろに消灯してしまうため、深夜にトイレや水汲みをしに行く時はライトが必須となる。それでも、当日の宿泊者は意外に多く、湖の近くのサイトは人気なのか、程よい間隔でテントが立てられており、バイクでのツーリングキャンパー や、小さい子供連れファミリーキャンパーがそれぞれのスタイルで野営を楽しむ姿が見えた。何にもないことが最大のサービスとうたっている野営場は、大自然を求める人には最高な場所なのだと実感した。キャンプ場西側の炊事場とトイレの間に広い場所が開いていたので、そこを



冒険倶楽部の野営地とした。まずは寝床確保のテント設営。その後、焚火台を囲むようにそれぞれが椅子とテーブルを設置し、宴が始まる。夏至が過ぎて2週間では、なかなか夜が訪れない。我慢できず焚火を始める。我慢できなかったのは焚火だけではない。冷えたビールは最高に美味しい。本日のメインはジンギスカンとホルモン。十勝には美味しいジンギスカン屋がいくつもある。『白樺』『有楽町』『平和園』…。観光客で賑わう人気店も多く、近年は“隠れた名店”を探すのが難しくなってきた。しかし、十勝には今もなお、地元の人々に長く愛され続ける老舗がある。

そのお店は昭和30年代に創業し、現在は三代目が伝統の味を受け継いでいる。創業者が遠方から十勝へ移り住み、当時としては珍しかったジンギスカン鍋の専門店を開いたことが始まり。60年以上続く歴史あるお店。

ここのお店は落ち着いた雰囲気で、観光地の喧騒から離れてゆっくりと食事を楽しめるのも魅力のひとつ。訪れた際には、席の案内や食べ方の説明など、丁寧に対応してくれる。お客様に一番おいしい状態で味わってほしいという思いが伝わってくる。肝心の味は、薄味であっさりとしているながら、後を引く深い旨みが特徴。ジンギスカンもホルモンも、長年愛されてきた理由が一口でわかる。まだ味わったことのない方には、ぜひ一度試していただきたい逸品。焚き火を囲みながら楽しむのも、また格別。十勝で本当においしいジンギスカンを探している方に、ぜひおすすめしたい一軒。ホルモンを食していると、サッポロ黒ラベルの350ml缶



がすぐに無くなり、アルコール度数の高いお酒に手が伸びる。談笑に花が咲く中、突然、幸田会長にノコギリは持っているかと尋ねられ、すぐに用意する。会長の後に続き歩いていくと、足元には折れたマツの枝が落ちている。ノコギリを使って40cm程度の大きさに切り分ける。焚き木の現地調達だ。針葉樹の薪は火力が強い。油分が多く含まれているためか、炎がとてもきれいに見える。現地調達の薪に魅了され、

何度、松の枝を探しに行つたことだろうか。何度枝切りをしたことだろうか。焚火のために斧やバトニング用のモーラナイフを用意していたのに、一番役に立つたのは、このノコギリだった。焚火とウイスキーに非日常と癒しを与えられ、心地よい疲労感が眠気を誘う。一人、また一人とテントに消えていく。辺りを煌々と橙色に染めていた焚き火は、ゆっくりと暗闇に負けていった。



白雲山登り



白雲山山頂



白雲山下山



温 泉

夏の北海道は朝が早い。7月6日の日の出時刻は3時55分。闇夜を照らしていた焚火は灰色の灰に代わり、太陽の光がそれに代わって、周囲を力強く照らしている。昨晚、お腹がいっぱい食べきれなかった横川社長自家製の豚汁と飯盒飯で朝食を済ませ、後片付けを始める。食材、テーブル、椅子、テント、寝袋をコンパクトに収納しリヤカーで車まで運んだ。少し動いただけで汗が滲む。午前8時半の気温は約26°C。今日も真夏日の予報は当たってしまいそうだ。受付番号『48』と書かれた白い旗を無人の受付に戻し、野营地



を後にした。然別湖からパールスカイラインを通り糠平温泉郷へ抜ける。そこから国道272号を層雲峠方面へ15kmほど進むと目的地が見えてきた。幌加内温泉 湯元 鹿の谷(かの



や)。ひがし大雪の秘境にある温泉だ。開業は昭和8年(諸説あり)となっており、長い歴史の中で管理者がたびたび変わり、令和5年からは新しいご夫婦が運営を引き継ぎ、歴史を継承している。到着したのは日帰り入浴開始の午前10時ちょうど。

古い建物だが、改築されているようで、清潔感のある内装が安心感を与える。内風呂は、何度も修復を重ねられたコンクリート製の浴槽が3つ。それぞれ、ナトリューム泉、鉄鉱泉、カルシウム泉と違う泉質を楽しむことができる。意外だったのは打たせ湯があったこと。洗い場はタライだけのとてもシンプルな造りとなっていた。窓から差し込む柔らかな日の光により浴室はとても明るく、青葉が茂った木々が外の景色を落ち着かせていた。心も体もきれいさッパリした頃、冒険の終わりは近づいていた。明日は月曜日。また、いつもの日常に戻らなければ

ればならない。計画・準備・実践・そして達成感。冒険も仕事も同じだと思う。そして、達成感を糧に次の目標を見つけ、みんなで前に進んで行ければ、今日と同じ感動を味わうことが出来るような気がする。

最後になりましたが、お忙しい中、日程調整を頂いた幸田会長。幸和運輸(株)横川社長。播磨取締役。横須賀支店長。半田部長。下浦次長。森谷課長。有意義な2日間を過ごさせていただき本当にありがとうございました。また、次回の冒険もよろしくお願ひいたします。

帯広支店 肥料課 信行友寛

